サードプレイスとしてのプロボノ

大阪市 市民局 区政支援室 地域力担当
担当係長 井川 啓一郎さん

ファーストプレイスである自宅と、セカンドプレイスである職場。その往復だけという毎日は何だか物足りない。そこにもう一つ、自分らしく過ごせる場所（＝サードプレイス）を持つことで、日々の生活はぐっと色味を増してくる。

プロボノで地域の課題を解決

２０１３年1月、大阪市鶴見区緑地域で、あるプロジェクトのキックオフミーティングが開かれた。メンバーは、従来の町内会に替わる新たな自治組織として設立された「地域活動協議会」の5人と、プロジェクトのサポートを任されたプロボノチームの3人。シニア層がメインの地域活動協議会に対し、プロボノチームは若手で構成されている。その一人がメンバーから〝いっきー〟の愛称で呼ばれる井川啓一郎さん。大阪市職員だが、仕事とは全く関係なく一市民として参加した。

「初顔合わせだったのですが、なごやかな雰囲気で、ざっくばらんに話ができました。地域活動協議会の会長さんは地域活動に対してすごく熱量のある方で、責任は自分たちがもつから遠慮なくやってほしいと言ってくれて心強かったですね」

大阪市では地域コミュニティの再生に向けた取り組みが進められているが、その拠点となるのが小学校区ごとに設置された「地域活動協議会」である。高齢化、硬直化していた従来の町内会を刷新し、若い世代や移住者など幅広い住民も参加しやすい組織を目指して立ち上げられた。

「地域活動への参加を促すにはどうすればいいのか、運営が難しくなっている地域の集会所やお祭りはどのように改善していけるのかなど、どの地域も課題は山積していました。これらを解決するための一つの手法として、緑地域ではプロボノを活用したのです」

「プロボノ」とは、仕事で身につけた知識やスキルを生かしたボランティア活動のことで、ラテン語の「公共善のために（Ｐｒｏ Ｂｏｎｏ Ｐｕｂｌｉｃｏ）」が語源となって

【いがわ・けいいちろう】
1976年、兵庫県伊丹市出身。一橋大学社会学部卒業後、2000年に大阪市役所入庁。市立更生相談所での生活保護担当を皮切りに、主に福祉、保健衛生分野の業務に携わる。プライベートでは、特定非営利活動法人サービスグラントのプロボノワーカーとして地域活動協議会支援のプロジェクトなどを経験。2014年に異動後は、地域の活動支援の人材づくりやICT活用による課題解決などのプロジェクトを担当している。座右の銘は「至誠天に通ず」。妻と子ども２人の４人家族。

地域活動協議会とプロボノチームで意見交換を重ねた

いる。もとは弁護士が法律の知識を生かして行う無料相談などの社会貢献活動を指していた。実際、アメリカでは弁護士に年間50時間のプロボノが課せられている。

他の職種にも拡大されたプロボノという仕組みの日本における草分け的存在が、「特定非営利活動法人サービスグラント」である。サービスグラントは、ビジネスパーソンが仕事で培ったスキルや経験を活かして大阪市内の地域コミュニティの課題解決をサポートする「大阪ホームタウンプロボノ」の中心的役割を果たしていた。

「大阪ホームタウンプロボノ」では、1期目の支援先として先進的な地域活動協議会を2か所選定した。そのうちの1つ、大阪市鶴見区緑地域をサポートするプロボノチームのメンバーとして、民間企業で活躍するビジネスパーソンと共に入ったのが、井川さんである。

絶対良い仕事をしてやろう！

「緑地域は緑豊かな住宅地で、子育て世代のファミリーも多く住んでいます。〝子どもたちの地域に対する愛着を育む意味でも、地域で子育てしていく仕組みをつくりたい。それも、ビジネスとして持続できるように。とは言っても、何から始めたらいいのかわからないので、一緒に考えてくれないか〟。それが地域活動協議会からのご依頼でした」

プロジェクトのテーマは「子育て支援のコミュニティビジネス可能性調査」に決まった。しかしながら、プロボノチームとて子育て支援は全くの未経験分野。「何から調べていく？」「制度的にはどうなってるの？」から始めなければならない。

地域活動協議会総会への参加はもとより、ファミリージョギング大会やふれあい喫茶、朝市など地域のイベントにも積極的に足を運んだ。「まずは、地域の皆さんと思いを共有したい」と考えたからだ。

子育て支援のニーズを把握するため小学校を通じて保護者アンケートを実施すると、市の委託で行われている、学校での放課後児童の預かり事業に不満をもっていることがわかった。だったら、不満の原因は何なのか。掘り下げるべくPTAの集まり等に参加し、生の声に耳を澄ませた。子育て支援のコミュニティビジネスで成功しているNPO法人を訪問し、インタビューも行った。

納得いくまでヒアリングや意見交換をし、中間提案を経て、最終の事業計画提案に至った。提案したのは、前述の放課後児童の預かり事業を、地域活動協議会が受託してしまおうというプラン。市の委託事業で、利用者の信用を得てニーズが高まってくれば、そこからコミュニティビジネスを展開することもできる。事業運営のために必要なスタッフ体制、ボランティアの有償無償の線引き、収支シミュレーションなど具体的な経営案も盛り込んだ。

プロジェクト進行中の6カ月間、プロボノチームの3人は、出張など仕事で多忙な合間を縫ってミーティングを重ねた。

「時間のやり繰りは大変でしたが、メンバーの気持ちが途切れたことは一度もありません。皆、〝絶対良い仕事をしてやろう！〟という気持ちでつながっていました」

マーケティングやプレゼン、顧客満足度の上げ方を考えるのが得意な民間企業の2人に対し、井川さんの強みは制度に対する知識。「町内会の仕組みにしても、学童保育に関する制度にしても、仕事で関わっていなくても、何となくはわかりますし、制度関係はどこを調べればいいのかわかります。地域や学校に対して物事を進める時に、まず誰から話をしたらいいのかも肌感覚でわかります。そういう点では、僕なりに役に立てたのかなという

【写真上】プロボノチームとサービスグラントとの打合せ
【写真下】子育て支援のコミュニティビジネスで先進事例となる大阪市内のNPO法人を視察

実感はあります。少人数ではありましたが、抜群のチームワークで完走することができて、プロジェクト完了後の達成感は言葉にできないほどでした」

ネクタイしてこなくていいから

井川さんは２０００年に大阪市に入庁した。中学受験塾の授業で読んだ「天声人語」がきっかけで新聞記者に憧れたものの、希望は叶わず、地方公務員になった。

最初の勤務地は西成区の釜ケ崎。釜ケ崎は、国内最大規模の日雇い労働者のための簡易宿泊所が密集する地域で、あいりん地区とも呼ばれる。このあいりん地区に市が設置した更生相談所のケースワーカーとして、日雇い労働や路上生活を余儀なくされている人たちの相談にのり、支援をしていくのが井川さんに与えられた任務だった。

初出勤日、最初に上司に言われた言葉は、仕事の大変さを物語っていた――「明日からネクタイしてこなくていいから」。

「最初に聞いた時は〝へっ？〟と思いましたね。普通はネクタイをしていくものじゃないですか。でも、相談者に引っ張られることがあるから、ネクタイをしてこないようにと。衝撃でしたね」

相談者から「何とかしてくれ」と詰め寄られても、どうしようもできない時もある。「お前、覚えとけよ！」とすごまれることも日常茶飯事だから、いちいち気にしていられない。

「入庁時にどんな仕事がしたいか尋ねられ、〝社会が良くなるような仕事がしたいです〟とは答えましたが、まさか最初から第一線の現場に行くとは思ってもみませんでした」

酸いも甘いも噛み分けてきた人たちを相手に相談業務を2年間やり遂げ、異動した先は本庁の高齢施設課という部署だった。

今でこそ民間企業による介護施設も増えたが、介護保険がスタートして間もなかった当時は、行政主導で施設を整備しなければならなかった。初任地での相談業務とは一転、施設整備に向けて都市計画法、建築基準法、土木技術等々勉強しなければならないことばかり。日々の仕事をこなすのに精一杯だった井川さんに上司が言った――「仕事に対して自分の思いをちゃんと見せていけよ」。

「その言葉で、改めて自分がやりたいことを考えました。社会の為になるようなことがしたいと漠然とは思っていたものの、いろんな部署で働く中で、一体何がしたいのだろうかと」

明確な答えは見つからなかったが、「与えられた仕事でも、そこに自分なりの考えや思いをもって仕事をする」――そんなやり方はだいぶ身につくようになった。

庁外で出会った熱いヤツら

その後、自らのターニングポイントとなる出来事があった。それは、大阪24区内の一つ福島区役所に勤務していた２０１０年、ふと目にした新聞記事で、住まいのある奈良県生駒市で行われる「自治体職員有志の会」のオフ会開催を知ったことに端を発する。「地元で注目を集めている市長の話が聞けるなら」くらいの気持ちで参加したオフ会で、勧められるまま会のメーリングリストに登録した。そのメーリングリストを通じて、東京で自治体職員をしている大学時代の先輩と偶然つながり、そこから自治体職員のネットワークが一気に広がっていった。

「元来、外に目を向けるようなタイプではなかった」という井川さんにとって、庁外で出会った自治体職員たちは刺激的だった。どうやって地域を良くしていきたいのか、社会に対する夢、自らが目指すべき方向、そんな思いを目を輝かせて語る姿は新鮮だった。

「さわると火傷（やけど）するくらい熱い人たちを見て〝こんなヤツらがおるのか！〟と。別世界の

人間を見たような感じでした」

職場という枠を越え、地域に飛び出し果敢にチャレンジしている彼らに触発され、井川さんは「自分も何かやってみたい」という思いを抱くようになっていった。

とは言っても、職場である大阪市内には張るべき根がない。よそ者がいきなり地域活動や町内会に参加することはできない。「自分には何ができるのだろうか」と思っていた矢先に出合ったのが、プロボノだった。

「社会人が仕事で培った知識やスキル、経験を生かして、NPOや地域活動のお困り事を支援する」――兵庫県庁の若手職員による勉強会「元町カフェ」でサービスグラントのプレゼンを聞き、井川さんは「これ、ひょっとしていけるんとちゃうか！」と閃いた。後日サービスグラントの説明会に足を運び、プロボノワーカーとして登録した。その初仕事が件（くだん）のプロジェクトである。

経験が仕事にフィードバック

役所で働いていると、業務委託でもなく、請負や契約に基づいた仕事でもなく、民間企業の人と同じ立場に立って、一つのゴールを目指していく機会はほとんどない。井川さんにとって、異なる文化をもった人たちとプロジェクトを遂行していくプロボノという活動は、驚きと発見の連続だった。

「例えば、地域住民の方と打合せをするでしょ。その後プロボノチームでは〝お疲れさまでした〟とならないんです。〝今からラップアップするよ〟となって、その日のうちに振り返りと次の打合せに向けた準備をきっちりする。そんな経験なかったから、目からウロコでした」

プロボノは言わば他流試合。異なる流派の人たちとぶつかり合う中で、自分にはない考え方ややり方を知り、能力の幅を拡げていくことができる。ボランティアという緩やかな縛りの中で、仕事ではできないことにも思いきりチャレンジできる。

井川さんは、プロボノで経験を重ね視野を広げたことで、自分の目指すべき道が見えてきた――「市民の方と一緒に、これからの新しい自治の仕組みをつくっていきたい」。

その思いが引き寄せたのか、市民活動や地域活動の活性化に携わるポストが庁内公募に上がった。勝手知ったる部署にいたほうがラクなのかもしれない。だが、井川さんは「こんなチャンスがあるのに、手を挙げないでどうする」と自らを奮い立たせた。プライベートで大阪ホームタウンプロボノに参加した経験が評価され、2014年に希望のポストに着いた。

現在は区政支援室地域力担当として、大阪市の地域力を高めていくための様々な企画、調整を行っている。身体の中に蓄積されたプロボノでの経験や知識はいかんなく発揮され、プロボノワーカーに登録して以来築いてきた人脈は仕事でも大いに役立った。プロボノに参加したことで、補って余るほどのフィードバックがあった。

地域活動に一歩踏み出してみませんか

「僕にとって、プロボノは仕事を離れて楽しめる居場所すなわちサードプレイスです。仕事も家庭も大事ですが、それだけだと視野は広がっていかない。サードプレイスを持っていると得られるものも多いですし、精神的なバランスを保つことにもつながります。サードプレイスは趣味の仲間でも学生時代の友人づきあいでもいいですが、〝せっかくなら地域活動に関わってみませんか〟と言いたい」

地域活動に関心があっても一歩を踏み出せない人は多い。地域力担当である井川さんにとって、どうすれば一歩踏み出してもらえるのかは思案のしどころだ。

「〝地域活動は一度参加すると抜けられない気がするから、怖くて踏み出せない〟という声をよく聞きます。ですが、参加したい時に、自分のできるところから始めていけるんです」

もちろん、コアメンバーには長いスパンで関われる人材が不可欠だが、短期の人材と長期の人材に二極化したとしても、担い手は断然多いほうがいい。

「地域活動に全く関わりなかった人にも活躍できる場があることを伝え、いろんな人が参画できるようにしていけたら。そうやって社会が変わるお手伝いをすることが、僕が今一番やりたいことです」

そう語る瞳には、確かな決意が見えた。

（取材／ライター　更田沙良）